

へしたる中に入れて、ざつとわけて、いろくに
煮物にも、汁物にも用ふべし、

フレーベル會俳句端書集

一、課題 當季雜吟一人十句以下

一、締切 四月二十五日限り

一、披露 明治卅八年六月發行本誌文苑欄

一、賞品 天地人三座には美景を呈す

一、撰者 當分本會の撰とす

一、投稿 本誌購讀者は何人にも投吟することを
得用紙は繪葉書に限り（眞筆刷物
隨意）住所氏名雅號を明記し必らず

左の名宛にて送らるべし

埼玉縣入間郡芳野村

フレーベル會俳句掛

第九回俳句端書集

鹽野奇零宛

福引や無慾な子ほど大わたり 東京 辰己 我庵

泣た子の供して行くや奴風 同

雨やみて霞む野山や麥二寸 埼玉 田村 破笠

若鮎や綱打つ空の薄ぐもり 同

傾城に歌乞はれけり月おぼろ 東京 藤並ゆかり子

江上の春また淺し旅の宿 同

溝口に一とかたまりの根芹哉 埼玉 黒田 素人

囀りの聲麗はしき野山かな 同

鶯の聲潔よし朝日和 埼玉 帶白園一甫

如月や夜雨上りの野の景色 同

旅宿から相生傘や春の雨 長野 飯塚 曉霞

菜の花や藁屋二軒の這入口 同

春雨や蕭條として柳原 陸奥 須藤 美佐

花七日心野にあり山にあり 同
 麗や錦の砂の東濱 同
 海苔摘むや風なき海の暖かき 同
 朧夜や白酒賣の小提灯 同
 裾村の川に春めく小鮎かな 同
 菜の花や十萬石の城の跡 東京 平岩 學洋
 春の水人の心に流れけり 同
 春寒し日蔭に凍る繻れ炭 仙台 立花 一瓢
 若草や枯野の名残處々 同
 馬ばかり酒屋の門の柳かな 同
 朝風や小鳥の聲に霞む山 越後 加藤 春陽
 草餅や生れた家へ客に来る 同
 梅一と木暮れ残りけり藪の中 信州 今井 一舟
 片側の崖高くして葦かな 同
 人去て物静かなり梅に月 大和 津谷 柏山

一と渡しかくれてもよし春の月 同
 雪洞の影に小さき雛かな 同
 飛石に陽炎の立つ小庭かな 上野 加藤よし子
 潮の香や素足つめたき遠干潟 豊前 金子 琴月
 舟を曳く高瀬の川やとぶつばめ 岩代 荒木 柳江
 飛ぶ鳥のくゞる様なり八重霞 栃木 櫻井 閑山
 月影も馴染まぬ夜なり猫の戀 岐阜 野寺 幽韻
 土を抜く芽獨活に霜の別れかな 上總 高橋 波月
 白魚や花に濁らぬ隅田川 大和 淺見 秋夢
 涙多き配所の歌や櫻鯛 常陸 落 花 庵
 皆酔ふて漕ぐ人もなし花見舟 武藏 山田だるま
 鼓打つ能樂堂や春の月 東京 井上さよ女

三 光

天、訪ひよりて逢はざる戀や春寒し 藤並ゆかり子
 地、焚捨てた煙りに深き余寒かな 立花 一瓢

人、摘草や忘れて來たる藁草履 山田だるま

追加 無一庵鹽野奇零

雨多き旅の日記や惜む春

草鞋賣る軒端の低し糸柳

軍神の俤見えて散る櫻

あした立つ奈良の旅寐や惜む春

寫生して暮る、裾野や夕霞

薄曇る霽や門田の初蛙

編輯記者白す。此俳句集、前一回分郵便上の間違のためによ到着せず、爲めに前號には掲載するを得ず、目下調査中なれば、了承あらんことを乞ふ。

家庭に於ける所感

長野市 飯塚忠次郎

(十三) 小兒と依頼心

小兒が何故に依頼心を惹起するようになるでしよ

うか、此問題は小兒のあるお家庭ではとくと御注意なさつて、十分御考究なさるべきことではないかと思はれるので御座います、さてそれはどういふことが原因となるのかといつたならば（小兒が此の依頼の心をおこすといふことには）種々ありましようが第一に家庭に於ける平素のしつけによることは申すまでもありませぬ。それであまり小兒をあまやかしたり、小兒の言ふ事を一から十まで、其出來得ると得ざるをとはずさいてやるやうにすると、そこから何事をなすにも人たのみをする様になつてゆくの御座います、私はこのようになちやはやいふてそだてるのは眞に小兒を愛育するといふものではなからうと思ふのです、習慣といふものは恐るべきものであつて、自分よりゆうへのものや下女下男を使用するなどは何